
べんりーや (仮)

早川 燕

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

べんりーや（仮）

【Nコード】

N3483BA

【作者名】

早川 燕

【あらすじ】

時にして探偵、ハツカー、医者そして依頼とあらば、報酬次第で殺しさえもいとわなない、俗に言う何でも屋、またの名を便利屋の葉風悠がある一つの事を胸にさまざまな依頼人の依頼をこなしていく、そんな物語。

1 - 1 便利屋、葉風（前書き）

はじめまして、もしくは今作も宜しく願います。
早川燕です。

思いつきで始めた今作『べんりーや（仮）』
そこまで長い作品にはならないかもしれませんが、よろしく願
います。

1 - 1 便利屋、葉風

週末の大通りを黒いコートに身を包んだ、黒い長髪の男が、歩いていた。

時間帯が早朝とまだ早いいため、男のほかに歩いている人影はない。

「さみ…」

男がこのような時間帯に歩いている理由は、仕事だからだ。

男の仕事は、探偵で探検家で医者でハッカー。そして、時にして殺しも厭わない。

報酬次第で何でもやる。いわゆる何でも屋、またの名を便利屋だ。

ちなみに今回の仕事は、捜し物だ。

事情を説明するために少し時をさかのぼる。時は、男が大通りを歩いていた

時の二日前、彼の事務所に、ダンディなおじさんが杖をつきながら、入ってきたところまで遡る。

ガチャッ

男が、デスクワークを淡々とこなしていたところ、急に扉が開かれる。

突然入ってきた、おじさんに男は多少面くらい、文句を述べようとするが、

おじさんの雰囲気がただならぬ物だったため、文句を飲み込み、ソファアーに

座るよう進める。

「どうぞ、おかけください。（と、というか、だれだ？アポもなしに…）」

「失礼する。」

スッと音を立てずに、ソファーへと腰をかける。

「突然押し掛けてすまない、私は春川栄作と申す。早速だが、依頼をしたい。」

「…どうぞ。」

男は、春川栄作と名乗る男の依頼を聞いてみることにしたようだ。

「うむ…実はだな…これを、探してほしいのだ。」

そういつて取り出したのは、一枚の写真だった。

「…拝見させていただきます。」

「どうぞ。」

「では、失礼します。」

写真を見ると、男は息をのみそして、顔を強ばらせた。

「…これは…」

そんな男の表情を見ると、春川は満足げな顔でうすい笑みを浮かべる。

「引き受けてくれるか？」

「報酬次第で。」

「ふむ…なら、これでどうだ？」

春川は、片手を差し出す。

「五万ですか？」

男は、全く足りないと言うような目で春川を見ると、お引き取り願おうとすると

「いや、五百万だ。」

春川から、破格の報酬額が提示される。そのことからこの依頼が、結構大変な物と言うことが、よくわかる。もちろん男もよくわかっている。

しかし、ここで引き下がるのは男の中のプライドが許さない。

「…！わかりました。必ずや探し出しましょう、我が名、葉風悠はかぜゆうの名にかけて。」

1 - 1 便利屋、葉風（後書き）

感想、批判、何でも待っています。

ちなみに、ネーミングも思いつきで行きます。

1・2 黄金の懐中時計（前書き）

こんにちは、2話目です。

1 - 2 黄金の懐中時計

悠は、便利屋としての仕事を請け負い、その資料を集めるために、この朝早くに町に出ているのだ。向かっている先は、オカルトショップで、そのオカルトショップが、店長の趣味で夜中から早朝までしか営業していないのが早朝に外出しているもつとも大きい理由である。

10分かそこらで、例のオカルトショップに到着すると、怪しさ純度100%の外観の店の扉をギイイと音をたて、あける。

入ると、前髪で目が隠れ、黒いローブを纏った魔術師のような男が出迎えた。

「いらつしゃい、葉風悠くん…キキキ」

「あ、ああ、久しぶりだな、ユーリアス。早速で悪いが、これを見てくれ。」

「ほんとに早速だね…ん？なんだい、写真？」

悠は、ユーリアスという名の男の、何ともいえない薄気味悪い雰囲気気に
たじたじになりながらも、目的を果たすために、依頼品の写真を見せる。
すると、ユーリアスにすぐに反応があった。

「…黄金の懐中時計か…こいつを依頼するとは、その依頼人相当、わるいやつかもしれないね…」

「やっぱりか…でも、なんで悪人なんだ？」

「こいつは、曰く付きの時計さ。黄金の懐中時計…その時計を手にした者は、自らの寿命の2分の3差し出す代わりに、願望を1つ何でもかなうとも言われている。

そうさ、今まで行ってきた悪行もなかったことにもできるだからさ、

その依頼人が相当悪い奴かもしれないってこと。まあ、たまたま黄金の懐中時計の噂を聞きつけただけかもしれないけどね。」

ユーリアスは、淡々と悠に情報を与える。

「ふむ…（あの春川とか言う男が、たまたま噂を聞きつけただけってのは

なかなか考えにくい、となるとやっぱりあいつは、悪行を働く奴か…）」

そうか…ほかには、何かないのか？どこにあるとかさ？」

悠は、春川を悪人認定すると、ユーリアスに更なる情報を求める。

「うーん、そーだね…ああそつえば最近、黄金の懐中時計を探してる

女性がいるって聞いたな、お客さんに。」

「…（じゃあ、そいつにあってみるのもいいかもな。）どこにいるんだ？その女性。」

「確か…この町の居酒屋「おてんと」に居候してるんじゃないかなかったつけ？」

名前は、矢板由美だったかな。」

「（さっそく向かってみるか…）そうか、わかったありがとう。」

「毎度、じゃあ情報料は？」

「分かってるさ、いつものところに20万な。」

「分かっているじゃないか、またおいで。」

ユーリアスに見送られ、オカルトショップをでると、一端事務所に戻る。

そして、愛車のアルファロメオmitoに乗り込み、例の居酒屋へ向かった。

mitoで一般道を走ること20分、旧道に入り10分すると居酒屋「おてんと」

が見えた。駐車場にmitoを止めると、サングラスを掛け、黒い長髪をサイドテールからまっすぐに下ろすと、居酒屋に入る。

ガチャ

「いらっしゃい。」

煙管を口にし、和服を着たワイルドなおばさん（いわゆる、ママ）が、歓迎してるようには思えない口調で中に入るよう勧める。

「何か頼むかい？」

「あ、いえ、矢板由美さんにすこしお伺いしたい事があるのですが？」

黄金の懐中時計の事について知っているかもしれない女性の名前を口にすると、

ママの顔がピクリと動く。

「ふん、あの子に用なのかい？ちょっと待ってな、」

「ありがとうございます。」

そう言うと、ママは上の階に昇っていく。

しばらくすると、ママと茶色の掛かったショートヘアの20代くらいの女性
が一緒に降りてきた。

「ほらよ、連れてきたぞ。」

「どうも…矢板です。なにか、御用ですか？」

「いや、大したことじゃないんだ。……黄金の懐中時計について聞きたいんだけど。」

タメを作り、小さくそれでいて聞く相手に威圧感を与える声で尋ねた。

1 - 2 黄金の懐中時計（後書き）

中途半端なところでカットなのが、すこし心残りの様な気もしないではないですが、まあ、このくらいで…

るーるる、るるる、るーるる

作者「はじめまして、こんにちは、このコーナーは作者がヒマな時だけ

超不定期にあとがきの所に入る、『 の部屋』です。それでは、今回のゲストは…」

悠「こんにちは、べんりーや（仮）の主人公、葉風悠です。」

作「というわけで今日のゲスト葉風悠でした。ありがとうございます！
ました。」

悠「ってちょっとまで、私は出てきて自己紹介して終わりなのか！
？」

作「…文句ある？」

悠「大ありだ！もっとなんか言えよ、なんかさ。」

作「えー…うーん、じゃあ一つだけ…

今回の小説の目標は…」

悠「そうそう、そういうのだよ。」

作「特にありません。」

悠「なんだよ！間空けてなんだよそれ。」

作「うるさいな、お前。よし決めた、お前次回根性焼きの刑な。」

悠「な、それだけはかんべ」「ボコ」「…」

作「と言う訳で、次回は、『悠と根性焼き』です。」

悠「違いますからね。嘘ですからね、…嘘ですよね…?」

作「………さあ?では、次回もよろしくおねがいします。」

1 - 3 呪われた美術館（前書き）

三話目です。第1章は、導入ですから、とりあえずいろいろ伏線貼つとこつと
思います。

この物語はフィクションであり、実在の人物及び団体とは一切関係ありません。

一度言ってみたかったセリフランキング（自分の）第5位です。

1 - 3 呪われた美術館

「黄金の懐中時計について聞きたいんだけど…」

悠のその言葉を聞くと、矢板由美の顔が一瞬青ざめたが、すぐに直ると、

今度は、由美の方から悠に話しかける。

「…どこから聞いたかは、分かりませんが…あれを探すのなら、やめた方がいいです。」

「…へえ、なんで？」

「…こんな話があります。今、黄金の懐中時計は東京にある呪われた美術館に厳重にガードされています。もちろん美術館へのハッキングもブロックされています。」

このような話を聞いても、だれも信じずに一笑に付すことは、間違いないだろう。

案の定、悠も全く信じていない様子だ。

「ふーん、で？その美術館は東京のどこ？」

「…行く気ですね？本当にやめた方がいいですよ。実際に行った人は、生きて帰ってきたことがないそうですから。」

「…依頼は、黄金の懐中時計の在処を調べるだけだからさ、行く気

はないよ。」

「…そうなんですか？だったらまあ…」

「ありがとうございます。」

なんとか、教えてもらえることになり、悠は内心ほっとする。

「ちょっと待ってください、今から地図を書きます。」

シヤツシヤツと簡易な地図を書き終える。女性だけあってか簡易でも、

十分なくらいきれいな地図だった。

「ここが美術館のある場所です。くれぐれも近づかないくださいね。」

「わかっていますよ。今回は、ありがとうございます。それでは、またいつか。」

「ええ、またいつか。」

そして、悠は入ってきたドアから外にでて、アルファロメオmitoに乗り

去っていく。由美は、それを店の窓から見ていた。

「…（チツ、こいつは早めに対処しなくてはな…）」

由美は、心の中で、獰猛な笑みを浮かべながら、一人考えていた。

悠が、居酒屋「おてんと」から出て事務所に戻ってきた時はまだ、昼の2時だった。

「うーん（春川に連絡するか…あんまり気乗りしないな…）」

悠が気乗りしないのは、春川がこの情報をしったら、確実に、美術館へ乗り出すに決まっているからだ。

「（でもまあ、五百万だしな…）」

悠も、人間だ。五百万が目の前に垂れ下がっているのに、とらないはずがない。

悠は、携帯端末を胸ポケットから取り出すと、春川に電話をかける。2〜3度のコール音の後、春川がでる。

「もしもし、」

「ああ、春川さんですか？」

「いかにも。」

「例の件、わかりました。今日中に事務所のほうに来られるでしょうか？」

「そうか…わかった、夕方5時にそちらへ伺う。」

「夕方の5時ですね。承知しました。それでは、お待ちしております。す。」

それから、多少言葉を交わした後、電話を切った。携帯端末をデスクの上に
放り投げ、豪勢なイスにもたれ掛かる。

「（5時まであと約3時間…どうするかな…）」

結局、悠が取った行動は、仮眠だった。そして、起きたのが、約束の5時の
20分前だった。

「…んー（って結構危なかった…）」

すばやく、身に着ている服の皺をのばし、長い髪をサイドで束ねると、準備完了だ。

準備を終えると、再び豪勢なイスに戻ると、ポケットとしている。

「（髪、結構伸びたな…今度切りに行くか…お！枝毛発見！）」

そのうち、枝毛探しに発展して行った。

十分後、約束の時間より十分早く、春川は事務所に到着した。

「おや、早かったですね。」

「十分前行動が、私の美学なのでね。」

「それは、いいですね。」

一通りのあいさつを終えると、春川が本題に入る。

「では、そろそろ教えていただきたい。」

「……はい、しかしその前に一つだけ教えていただきたいのですが……」

「为什么呢？」

「ありがとうございます。では、…何故、黄金の懐中時計を欲しがるのでしょうか？」

悠がこの質問をすると、春川の顔がわずかに、よく見ている者しか気づかないほどわずかに強ばった。

「ある願い事を叶えるためだ…これ以上は答えられない…。」

「…わかりました。それでは、本題に入ります。こちらの紙に黄金の懐中時計の

ある美術館の地図があります。」

その地図は、由美からもらった物のコピーだ。

「ほう…そこまで突き詰めたか…（思っていたより、情報収集能力があるのだな。）」

「…ありがとうございます、それから後、その美術館はひどい曰くがあります。」

その美術館に入ってから生きて出てきた人はいないそうです。」

「…ふむ…なるほど…そういった噂が流れるのも必然か…わかった、警告」

ありがたく思う、美術館攻略には細心の注意を払うことにする。」

「そうしてください。それでは、依頼料の方ですが…」

先ほどまでの剣呑な空気が、悠の依頼料の話で霧散する。

「おっとそうだった。ここに。」

懐から、紫色の布に包まれた札束が渡される。悠はそれを確認すると確かに受け取りました、と契約完了と心の内でつぶやく。

「それでは、またの機会のご利用をお待ちしております。」

「ああ、また頼むよ。」

悠は、春川を見送ると、金庫の鍵を取り出し、裏の方へ入っていく。

「…さて、と」

ガチャリ、と音をたて金庫の錠をあける。中には、ハンドガン、「オートマグ?」

と大量のマガジンが入っている。それを取り出すと、胸ポケットにつっこむ。

「春川さんには、悪いが私も参戦しようかな…」

悠の目には、光が浮かんでいた。

1 - 3 呪われた美術館（後書き）

誤字脱字報告、感想待っています。

るーるる、るるる、るーるる

作者「はい、今回も始めました。 の部屋でございます。
本日のゲストは…」

ユーリアス「やあ、みんな大好きユーリアスだよ。」

作者「はい、敵か味方か？どっちなのかよくわからない、ミステリアスなキャラユーリアスです。」

ユーリアス「そうだね、ミステリアスになるようにしてるからね。」

作者「それでは、まずはお話を聞かせて頂きましょう。早速ですが、あなたは、悠の敵ですか、味方ですか？どっちですか？」

ユーリアス「…さあね。今は、ノーコメントにしとくよ。じゃあ今日は、特別な客を待たせてるから、帰るね。じゃあ。」

作者「おおっと、ユーリアスさん、退場です。てことで、今回の

の部屋はここまでとします。それでは、次回もまた見てください
ね！ジャンケンポン！」

パー

「ウフフフフ、フハハハ、ハーハハハ！っゲホゲホ！」

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n3483ba/>

べんりーや（仮）

2012年1月13日03時50分発行